

6) 芸術 (美術)

AL型授業の実践・研究を自分なりに意識し取り組み、毎年報告をしてきた。そもそも芸術は、授業の題材一つ一つが「何を、どのように、どう表現し、どんな想いを伝えるか」を生徒一人ひとりが常に自分の持っている「思考力・判断力・表現力」を駆使する。教員はその力をさらに引き出し、高める指導をしながら取り組む。教科活動＝AL活動そのものである。しかし、最近それは本当にそうになっているだろうか、と疑問を抱くようになった。

先日、県高教研美術部会で研修会を実施した。研修会講師として全国を飛び回っている秋田県立西目高等学校の美術教師 黒木 健先生を講師としてお招きし、映像メディア表現の鑑賞模擬授業をしていただいた。模擬授業は、題材設定もワークシート等の資料も素晴らしく、感心するばかりだった。参加者も生き生きと取り組んでいる印象を受け、映像メディア表現という取り組みづらい分野に対し、大きな刺激と授業ヒントをもらうことできたい研修会となった。

しかし、一番の自分にとって衝撃的かつ心を動かされたのは、模擬授業だけではなかった。黒木先生は「美術とは何?」「美術の授業はなぜあるのか」「美術は何をする科目なのか」「美術には答えがないのか?」という美術教育の根幹とも言える内容について、「授業ナビ」という資料を作成し、生徒に配布し、美術そのものや美術の中身である絵画・彫刻、デザイン、映像メディア表現、鑑賞についての考え方を説明していることであった。当たり前のことと言ってしまうまでもないのだが、口頭で話すことはあっても、冊子ほどの資料を準備する教員は少ない。さらにそこを出発点とし、生徒に常に訴え、投げかけながら授業を展開する。生徒達がそれらを意識して授業に臨み、作品制作していることが作品例からも伝わってくる。あらためて自分の実践について振り返る機会を与えていただいた気がした。

AL実践研究のまとめの今回、「AL」の視点を踏まえつつ、「美術」の授業についてアンケートから検証し、見えてきた課題に対して自分の授業実践を振り返ってみた。

<アンケート結果から>—中学校の美術を通して見えてくるもの—

長年「美術」の授業の最初のオリエンテーションでアンケートを実施しているが、その中に中学校での美術の授業内容についての項目を設けている。中学校の美術については、義務教育にも関わらず専任教師が少ない。しかし、先生方が研究会等で交流されている成果か、実施している題材については思いのほか中学校もそれほど変わらない。自画像、想像画、木彫、ハンコ、ポスター、地場産業である粘土でつくる様々な作品等。完成した作品も似たような作品が多い。これらについて黒木先生との話を通じて題材設定に疑問が生じてきた。「○○を作ろう」「○○の絵を描こう」と最初から決まったテーマ・画材の中で作るのは、「美術」といえるのか? 主体的・対話的AL活動と言えるのか? 自分の計画していた授業内容についても、多くの見直すべき点が見えてくる。

本来、美術は制作者本人が「何を、どのように、どう表現し、どんな想いを伝えるか」を考え決定し制作するものが特徴だと考えるが、その視点からみると、題材を選ぶ際に、制作者ではなく教師主導で決めた、指示的指導になっていないだろうか。作業的な技術指導のみになっていないだろうか。知識を伝達するだけの指導になっていないだろうか。今年の年間指導計画の中で、そういった点を意識して自分の3つの題材・展開について検証してみた。

①鉛筆デッサン…**教**鉛筆の歴史 → **教**基本的技術 (グラデーション) → **生**グループ・クラスで鉛筆表現方法を模索 → **生**テーマ自由で鉛筆を使って描画作品制作

- ②学校に掲示するポスター制作…**教**日常生活のポスターやCMにふれる → **教**キャッチコピーの役割 → **生**テーマ・画材自由でメッセージに合うポスター作品
- ③ある風景に存在する自己…**生**自己分析・他者分析 → **教**油絵の道具や表現方法 → **生**テーマと風景・自己像の決定 → **生**表現や使用画材は自由に油絵制作

* 教員主導は**教** 生徒主導は**生**

①→③の順に取り組む際に、作品をどうしたいのか、生徒自身が自己決定するポイントを増やしていくように心がけている。しかし生徒主導で自由度が増すということは、反面、何をどう表現したいのかを決めかねて悩む生徒に対するアプローチが必要となる。AL活動にも通じるが、主体的に活動できない生徒に対し示せるヒントの引き出しをいかに多く持つか、美術教師としての指導力の更なる研鑽が必要不可欠である。これからも常に改善を重ねていきたい。

また、アンケートの中で、生徒達には美術の評価についてよくわからず疑問があることがわかった。自由な表現や個性を尊重し大切に育む教科の性質上、評価自体難しい教科であることには違いない。しかし成績をつける以上、だからこそ評価の観点をしっかり生徒に示す必要がある。できれば生徒の自己評価が、教師がつけた評価と同じになることが理想であり、それを目指して自分なりに評価方法を工夫してきた。評価については、発想・構想段階、作品制作過程、作品、発表、話し合い・鑑賞と大きく5つに分けて評価している。その中で、作品や発表は直接的な視覚+聴覚からの結果を通すため、評価も具体的な評価の観点さえ示しておけば生徒・教員双方に分かりやすい。しかし、発想・構想や制作過程、話し合い・鑑賞の評価については、発表会や自己評価の中で制作者である生徒自身が示さない限り、教員は全てを把握できず評価してしまう危険性が大きく、ここでの評価が曖昧となる。だからこそ、発表鑑賞会の準備段階として振り返りと自己評価用紙の作成には、この数年のAL研究においても重点を置いて取り組んできた。しかし、グループワーク等の話し合いに関しては、もっと分かりやすく評価を示すための手段として、ルーブリックは有効であり重要性を感じる。今年度の実際の授業には間に合わなかったが、今回作成したのが次の用紙である。来年度実際に活用し、生徒が主体的に考え判断し表現する授業に向け役立てていきたい。

共同作品制作 話し合いの評価用紙				<話し合いのルーブリック>	
年 組 番 氏名					
1 話し合いの自己評価					
A	B	C	D	E	
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを発言した。 ・他者の発言にうなずいたりしながら聞いた。 ・メモを取った。 ・質問をした。 ・他者との発言を関連づけた。 ・グループ・クラス内で最も発言した一人である 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを発言した。 ・他者の発言にうなずいたりしながら聞いた。 ・メモを取った。 ・質問をした。 ・他者との発言を関連づけた。 ・グループ・クラス内で最も発言した一人である 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを発言した。 ・他者の発言にうなずいたりしながら聞いた。 ・メモを取った。 ・質問をした。 ・他者との発言を関連づけた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを発言した。 ・他者の発言にうなずいたりしながら聞いた。 ・メモを取った。 ・質問をした。 ・他者との発言を関連づけた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いに参加しなかった 	
⇒ 6つ該当で A	⇒ 5つ該当で B	⇒ 4つ該当で C	⇒ 3つ該当で D		
2 話し合いでのMVPは誰でしたか? _____					

(文責 市岡)